福島県立医科大学 学術機関リポジトリ

FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

Title	Prognostic Significance of Insomnia in Heart Failure(内容・審査結果要旨)
Author(s)	菅野, 優紀
Citation	
Issue Date	2018-03-21
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/751
Rights	
DOI	
Text Version	none

This document is downloaded at: 2020-01-06T12:26:43Z

Fukushima Medical University

論 文 内 容 要 旨

氏名（しめい）	かんの　ゆき 菅野　優紀
学位論文題名	Prognostic Significance of Insomnia in Heart Failure

近年のメタ解析において、不眠症は、冠動脈心疾患や脳卒中の発症、さらには、心血管死亡と関連し、そのリスクを増加させることが報告されている。その背景として、睡眠不足や不眠症は肥満症や糖尿病、高血圧や脂質異常症を増加させ心血管疾患のリスクを上昇させると考えられている。しかし、不眠症と心不全の予後との関連はいまだ明らかではない。そこで、我々は、不眠症を合併した心不全患者の特徴と不眠症の予後への影響を明らかにするため検討を行った。2009 年から 2013 年に当院に入院し退院し得た心不全患者連続 1011 例を対象に前向き観察研究を行った。心不全に不眠（症状、既往）を伴う：不眠群 519 名と不眠を伴わない：非不眠群 492 名に分類し、2 群間における患者背景や退院時の血液検査、心臓超音波検査、運動耐容能の検査並びに心臓死および心不全増悪による再入院の心イベントについて比較検討を行った。研究結果は不眠症を合併した心不全患者の特徴として、高齢で女性が多く、心房細動や慢性腎臓病の合併率が高値であった。血液検査ではレニン活性、レニン濃度、アルドステロン濃度が高値であった。また、心臓超音波検査による心機能に差を認めないものの、運動耐容能が低値であり、心イベント発生率は高値だった。また、不眠症は心不全の予後予測因子であることがわかった。不眠症自体が心不全の予後に対し悪影響をおよぼしているのか、心不全の状態が悪いために不眠症になっているのか、眠剤の予後への影響などは今後の課題である。しかし、不眠が心不全に及ぼす影響は大きいと考えられるため不眠症を有する心不全患者に対して、引き続き積極的に介入していかなければならないと考えられた。

This paper was published in Circulation Journal 2016;80:1571-1577.

学位論文審査結果報告書

平成 30 年 2 月 7 日

大学院医学研究科長　様

下記の通り学位論文の審査を終了したで報告いたします。

【審査結果要旨】

氏名：菅野　優紀

学位論文題名 : Prognostic Significance of Insomnia in Heart Failure (心不全患者における不眠症の検討)

不眠症は心血管リスクを増加させる事が報告されている。申請者は、不眠症と心不全の予後の関連を明らかにするために、心不全で入院した連続 1011 例の患者について前向き観察研究を行なった。結果として、不眠群は高齢で女性が多く、心房細動や慢性腎臓病を多く合併し、レニンアンギオテンシン系の活性化が認められ、運動耐容能が低値であった。最長 5 年の観察により不眠群は心イベント（心臓死および心不全による再入院）発生率が高値であり、不眠症は心不全の予後予測因子である事が判明した。

本論文は研究方法、結果、および結論のいずれもが妥当であり、不眠

症が遠隔期の心不全イベントを増加させることを示した新規性を有し、臨床的意義も高く今後の研究の発展も期待できる。また、申請者は本研究において中心的貢献をはたし研究の意義を理解し説明できることを確認した。

以上より、本論文は学位論文として適応と判断した。

論文審査委員　　主査　横山　斉

副査　風間順一郎

副査　三浦　至